曉其堂句集

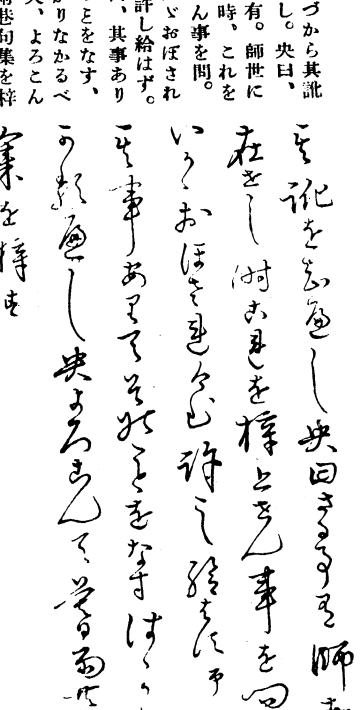
上

臥央曰、世に三傑集といふもの有。とりてよむ。雪中半化暮雨三叟の句集なり。半雪二叟の句、我是をしらず。吾暮雨叟の句をとる事、わづかに六百餘句、その馬の烏に啼、烏の馬に嘶もの、百七十餘句、いかにしてか其謬を正すべき。予曰、暮雨巷句集を木にえらば、

臥央曰、世に三傑集といふもの有。とりてよむ。雪中半化暮雨三叟の句集なり。半雪二叟の句、我是をしらず。吾暮雨叟の句をとる事、わづかに六百餘句、その馬の烏に啼、烏の馬に嘶もの、百七十餘句、いかにしてか其謬を正すべき。予曰、暮雨巷句集を木にえらば、

世おのづから其訛を知べし。央曰、さる事有。師世に在せし時、これを梓上せん事を問。師いかゞおぼされけむ、許し給はず。予又曰、其事ありてそのことをなす、はゞかりなかるべし。央、よろこんで暮雨巷句集を梓す。

士朗



曉臺先生發句集上

春之部

歲旦

ふり袖のやまとに長し日の始

太箸や後ゝにひかへし檜木山

鏡餅母在して猶父戀し

神の春楠もいはほと成てけり

人中の龍駈出む四方のはる

物わかれ、人語はじめてお
こる。

元日やくらきより人あらはるゝ

元旦龍門にありて、士峯の
初日をあふぐ。

忽然と活たり〳〵はつ日かげ

武陵迎春

としの名殘をしまむと再可
子が樓上に遊ぶ夜、門ゝに
鈴ふりならし、清祓して大
路をわたるものあり。

とし越の旅ゆきなりに辻はらひ

猶曙のけはひ見てむと酌て、
太陽を待ふたりみたり。樓
は隅田川の西岸に造り掛て
下總の國の限を見さけ、十
字街頭に市廛をさぐれば、
さながら淸して閑なり。

我と人と深山ごゝろや初日影

よろこびの雲見えそめて花のはる

いはゞいはむあら玉の夜のはじめとも

年頭元三の旦毎に蕉翁の筆
跡を開て、心ばかりの餼も
ちひなど備へ、菴の壽を測
るに、去年はつとむる事の
有て、かの一軸は宗祇法師
が靈の一字よりも、はかな
くなしつ。其料に宛ぬれば、
きたなくも一行を謹書し
て、改る心の玉ともなせる
なり。

此心我蓬萊のはな柑子

寓(偶カ)樂府臺に歸れば年
の壽をもてなさる。思ふ所
紀氏が客中にあり。

おしあゆはなくてもあらん干頭鱠

松のひまほのゞ見ゆるはなの春

蟄蟲うごめきて春陽を伺ひ
閑人鎖て御慶を避く。

むしけらもさし覗け此初霞

元日の子の日めづらしとて
人ゝを具し、東野に出、と
もに小松をとりて

根つかせて見せばやけふの子の日草

若菜

若菜舟一ふしあれや歌之助

京縞の頭巾で出たり薺うり

わかなつむ人をしる哉鳥靜

若菜つむ人落合ぬ紙や川

わかなの日晝から雨と成にけり

はつわかな鯉も切べき日なりけり

此門を名乘してゆけ若菜摘

雨中人日

裙(ツマドリ)や傘をさゝせてわか菜つみ
松かげにならびてうたへはつな摘
わかなの日三輪の酒うり出初たり
腰みのや己が礒田の若菜かり

この宵、朝はひときは事替りてさかゆく民の齊打はやす音のあやあるも、手つゝ成もさえ〳〵しく、一入ゆたけきおほもめぐみの皇朝こそ有がたけれ。

玉簾にきこしめすらむ齊打と
年のはるに春たちけるを
けふの春きのふと過し初若な
うめ
もどかしき梅二三日の苦かな
梅咲て十日にたらぬ月夜かな
火ともせばうら梅がちに見ゆるなり
曉のうめが丶ふくむ板戸哉
御文庫のこなたおもてや梅の花
かなぐつて捨る蔓ありうめのはな
長嘯の名殘もあらむをかの梅
浦のうめ花片つらにさきにけり
梅折て僧歸るかたは雲深し
突立てぬしなき杖や梅がもと
うめちるや草堂に燈歸し行
我宿のうめはいつさく梅の花

ふし見にて

梅林を出て懐に梅のつぼみ哉
梅林によるのほこりや薄ぐもり

正月十一日熱田踏歌

梅が丶に鼻息寒し笏拍子
うめが丶やつぼみはさまるはかま腰

聖廟法樂　四句

信仰を漢土(もろこし)までもうめのかぜ
うめさくら落花を踏ぬはやし哉
手向山有明さくら咲に鳧
花鳥のまとを筆のはやしかな

八十賀

梅柳八十からも壽む

大黒の讃

うめやなぎ三にさかづき初音の日

題畫梅

水潛る節くれうめのした枝がな
花はひとへふしくれうめの古根より

柳

ほつかりと黄ばみ出たり柳の芽
二日見ぬ程や柳のおもがはり
やゝしばしけぶりをふくむやなぎ哉
のら〳〵と柳見に行つゝみ哉
太刀の柄に手かけて潜る柳かな
吹あるゝ竹の中より糸やなぎ

簾前孤柳

見所はきのふをとつひ柳の芽
さし柳はかなきものゝ氣力かな
青柳に山路のこゝろはなれたり
人去て野中の柳風くらし
火燈(ともし)があぶらかけたるやなぎかな
篝火のとぼり付べき柳哉

武州八王寺(子)星布

曉のほしを繻りしやなぎかな

隆達が破菅笠しめをのかつ

ら長く傳はりぬ。是からみれば、あふみのやあだし浪寄せてはかへる浪、淺づま舟の淺ましや、嗚呼、又の日は、誰にちぎりをかはして色を、まくらの(の字衍カ)耻かし、僞がちなる我床の山、よし夫とても世の中。

こは北窓散人が己圖して自此ばさら言を其肩にものせし風情もしたはしく

て

しのばるゝ人閑そへて柳かげ

藪入

題里祭

藪いりを獅子の口より見初けり

やぶ入や木履踏かく人どゝろ

春雪

はるのゆき扇ではらふ衣紋かな

春の雪飛鴈の行降崩し

馬の尾をむすび揚たる雪間哉

雪解

雪解て沖中川を行方かな

ゆきどけや深山曇を啼烏

月曇る端山の雪解なくからす

古草やはるをり〳〵は雪の露

春日

日の春のちまたは風の光り哉

はるの日や梅のあたりのつゞみ箱

袖だけのまつの中行春日哉

春のくれ

秋は暮なむとする程燈とく立たるがよし。遲ければ老の心をへらして悲し。冬は又猶寒く、夏はうち護る人のたそやかれやと定かに見わかるほどに、遠くも近くもきよげに、燈しきらめきたるぞ涼しさ又あらじ。春こそ夫にはかはりめあなれ。柳のをぐらく、花のしら〳〵とにほひ殘つ、見やるかたはものわかず暮しづみて、風のさゝやかにおもてはこび、水は音のみ山ははるかにひさるまでも、はしゐしたる春のこゝろこそいとふかけれ。膝のまはりかいくらみぬるまゝ、燭などとり來たる本意なし。

我ためにとぼし遲かれ春の暮

こゝろほどうごくものなし春の暮

古琴やねずみ出て行はるのくれ

はるのくれよめりぎつねのくさのあめ

春夜

春の夜の月も推なり梅柳

はるの夜の月より明て天龍寺

春のよを雁おひあかす野守かな

はるの夜ぞひとつは雁もかへり來よ

春の夜や何事もなき三輪の杉

はるのよのうそひめ戀ふる梟歟

伊勢神宮參する人をおくり

て

春の夜の月に宿かれ花柑子

はるのよやぬしなきさまの捨車

春閨怨

閨ふかく牡丹にいどむ春の情
ともし火にこがるゝ蝶を夢路かな

春月

竹の葉の重るやとしの二日月
うぐひすの魂も奪ふかうめと月
うめに月月をうらなる夜なりけり
梅に月朗詠うたふ人あらむ
松とりて朔日ごろの松の月
くらき方はけぶるがごとしはるの月
べつたりとかすみかゝれり二日月
おぼろ月浪のうき鯛よるさへや
おぼろ月宇治の山邊を行ひとり
おぼろ〳〵ゆき一すぢのほそ江哉
大石らにかりがねくらし春の月

竹にふくろうの畫讃

衆鳥花に醉り。ひとり竹間にすめるものは

つく〳〵と何おもふ竹の月朧

鶯

けふはとくはつねうぐひすねぐらせよ
鶯の嘴あらひせり紙や川
うぐひすの聲くれて後日は入ぬ
鶯や竹の園生に何のたね
うぐひすのほそ脛高に山路かな
うぐひすやものゝまぎれに夕鳴す
鶯と貌見合する折戸哉
軒ちかしきのふの初音うぐひす歟
うぐひすの七ッとまりや清閑寺
鶯や人やり過す跡の聲
うぐひすの鳴てかくれる伏家かな
鶯のひよひと貌出す枯葉哉
うぐひすのけろ〳〵と初音づくり哉
うぐひすはみだれ聲なり小關越え
うぐひすや目をぱちつかす風のさえ
鶯の咽ふくらめしゆふ日かな

霞

八重霞日落ていまだ夜ならず
來てみればかすみの松に日暮たり

湖上吟

霞凝てものあらはなるうなへ哉
山くれて霞下せり大炊川
水の面にかすむ日の形みえにけり
浦くれてかすみながらに火灯りぬ
かすみこめて薄むらさきの匂ひ哉

春風

はる風の夜はあらしにみだれけり
里の子の松葉いたゞく春の風
春風や淺田の小浪あさみどり
はるかぜに吹れて落す羽織かな
高圓や峯の春風くも結ぶ
雞の尾に見るまでぞはるのかぜ
はるかぜにおさるゝ美女のいかり哉
明る野や兎の尻に春の風

春水

鳥の羽をみれば行なりはるの水
春の水東寺の西にみる日かな
うと〳〵し日の形みえて春の水

頭巾着て誰やらわたるはるの水

亡父三十三回

めぐり來て髪膚にかゝる春の水

烏雀、屋をめぐつて嚶〻と鳴、葛蔓、根を絶て末葉色を失ふ。平安に夜半亭蕪村子なく成ければ、俳諧の子等妙禪の志を山のごと積て台嶺の麓金禪精舍に法莚をまうくときこえしかば、年頃交游忘年の情に堪ず。手のものかいやり、國を出るより耳後に風を起し其日をあてゝ洛に至り、ともに迫慕の誓をなす。又うへもなき業のあらし、法は一味のともし火にかゝれば、梵摩岩にあたつて清馨あり。人語水に落て烟霞を披く。是皆故人が趣なればぞ、罔兩そゞろに我を率て對すると視れば幻〻、たゞ孤松鳥調有のみ。

影とらむとすればはるの水黄なり

白魚

隅田川漁火

しらうをの骨身を泱(トボ)すかゞりかな

しら魚やうき世の闇に目をひらき

軒うらや干鱈かけたる鹿の角

信樂の茶うりがさげし干鱈かな

春雜

春の海邊何に集る人一里

はるの海の眞中に有て目覺たり

卵吸ふ顏に罪なしはるの人

日くれたり三井寺下る春のひと

春の情うち返す三井のあらし哉

はる寒し風の笹山ひるがへり

春さむし貧女がこぼす袋米

人疎し蠶飼ふ女賢ならん

七條あたりにて

夕がほの種うゝや誰古屋しき

花か實か接木をめさる人心

涅槃會や雲下り來る音羽山

桂裏子七十賀

千代傳ふ親は親なり芋がしら

風巾

切てやるこゝろとなれやいかのぼり

松かぜのうしろになりぬ凡巾

出代

出かはりや君が花田の五尺切

春雨

たれ〳〵が夢うらきかむ春の雨

春雨や枯木の上を降くらし

旅人の夜川や越るはるの雨

はるの雨肝積持をなだめけり

春雨や猿子をいだく齒朶の露

手はじめは翌の茶山をはるの雨

專あり藻魚いとより春の雨

木の芽

倒木の芽を張岸のくづれ哉

蘆の芽に鴈の古屎なつかしや

若草の中にこもれりをみなへし

わかくさやくづれ車の崩れより
青草の上につもれる日數かな

龍門

誰人ぞ芹をさげこむ竹の門
蛭肥て芹ふしたちぬ日向水
茅ばなぬく小婿(督)が禿いや痩し
夜あらしや光偃す茅花原

蕨

負ふた子に蕨をりては持せける
わらび折に來ばこよ菴は叩鉦

菫

奥山や人住あればすみれぐさ
菫つめばちひさき春のこゝろかな

二軒茶屋といへるを皆〻題して

打ちらす酒千變すはなすみれ
竹の葉の花にかさなる菫かな
組落て雀はなかむすみれかな

燒野

なつかしや燒野のすみれ活かへる
人の親のやけ野の雉子うちにける

雉子

夜のありか又鳴かはすきゞすかな
つま戀やひと羽に雉子の山移り
ねむり〳〵さして行方や雉子の聲
三弦の川舟過てきじの聲
きじ鳴やうしろは須磨の藻塩草
夜をこめて關屋にさむし雉子の聲
茨五尺雉子のとまりあらはなり

名しるしの詞

道能つとむる時は名四隅に渡り、人能和。和(す字脱カ)ればよく人を益す。よく勤て風雅の信を忘れざれとなり。

雲ひくし日暮てくれぬ雉子の聲

雲雀

雨雲やをぐさかざして鳴ひばり
猪垣の崩れ口よりあげひばり
舞ひばり山家の煙はなれたり

陽炎

閑外に一室あり、号て松齋といふ。四壁三疊、めぐりに春草なびき合て、水南にながれ又東に流る。菜の花ちら〳〵と咲まじれば、田土叩く女どものだみ聲に古唄うたひ出、兎とらへるあらし、このまふしかくれ、雲雀鳴夕ながめも、倉庫はつかにそむけ、市廛百歩を隔されば、かならずひとつとして打見うち閑にはあらねど、閑にひかれて唯我おもふ所也。顯るゝもの、きはめて盡る期あり。心に觀るものは春の日の長しと、いづれしなあらたまり、夜色又情を移せり。松齋〻〻一松齋、一躍して雅境に入。

陽炎の物みな風のひかりかな
かげろふにほの有明の月高し
かげろふの中來てくらむ戸口かな
陽炎やはや水蓼のけしき立

かげろふの蜉蝣を育る晴間かな
陽炎やまだかた形のむしの息
かげろふや卵の虫の巣を出る

琴宇が墓前にて

かくばかりかげろふも胸をさすもの歟

猫戀

戀ねこのほだしも廿日ばかり也
こひ猫やわが古寺になき別れ

胡蝶

蝶とんで風なき日ともみえざりき
掬はれて行風情ありかぜの蝶
ともし火にこがるゝ蝶を夢路かな

春鴈

歸る雁蝦夷が矢先に待るゝな
ゆき果しとおもへば雨夜の雁ひとつ
春寒し比良の日向歸るかり
西山や日の上を行雁のすぢ
わかれ〳〵まつ山越えて歸るかり

おのれ曉臺、いへの國に母もたり。夜に添日にそひお

もひまぎるゝかたもなくて

啼こゑの母ありときこゆ雲に雁
降雨は夜を行鴈のなみだかも
雨夜の鴈なきかさなりて歸るなり

紅梅

紅梅や照日降日の中一日
はなみちてうす紅梅となりにけり
紅梅や檜垣崩れておぼろ月

椿

赤椿咲し眞下へ落にけり

梨子

滴せばしづくと絶むなしの花

海棠

海棠や誰が置たる楢枕

田にしうる犀や竹田の瘦女

と臥央がかつぎ出て、是におとの句あれといへるに

親なしと答ふ淀野の田螺うり
水口にころがりを打田にしかな
田にし鳴を田のたむぼゝ打ほけぬ

蛙

蓬生に身をうち付てなく蛙
簪にかはづの小腕おさへたり
果なしや今朝に成てもなく蛙
へしをれの河竹傳ふかはづ哉

菜花

菜のはなや人遠く藪疊はり
なの花や半見え行葬の人
菜のはなに目當の柳風くらし
轍〻雨の菜のはなながるなり
山吹の小屋なの花の街かな
菜の花や市なぐれ行餃烏賊
なのはなやかへり見すれば邯鄲里
菜の花のはつ〳〵みゆる都かな
なのはなやくるればもとの朝ぼらけ
城春にして菜のはなさきぬ外廓
なのはなにしのび女の戸出哉
菜の花の脊戸を流るゝ雨間かな
なのはなや南は青く日はゆふべ

菜の花や是等も地主の木の間より
なの花や盃持て叹(歎ヵ)うつり
山もりがなのはなさきぬ鯨汁
年〳〵や里の山畑うちのぼり
畑うちや鳴呼陵のまつの陰

臥央が住居ましける時

子母錢や置て巣立る軒乙鳥
燕の面なぬらしそ浪がしら

柳に燕の畫讃

花の醉さましに來たか夕つばめ

山吹

しのび路のやまぶきかゝる髻かな

題山家

芋汁に八重山吹の詠めかな
白雞の山ぶきちらす逆毛哉
散ときはやまぶき低きうらみ哉
おぼかたに山吹ちりて起ならひ

三月

烏賊の墨ながるゝ小家の節句哉

雛

雛の間にとられてくらきほとけかな
ひなの間の客や桃かたさくらかた

不夜樓にて

雛のうたげ齡の欠伸ぞ恨なる
醉さめやほのかにみゆるひなのかほ
齋坊を今朝は雛の一座哉

加茂の下流に遊びて

誰か有汐干うつさば河原松

ある人の曲水の宴まねびて遊ぶと聞えけるに、句を乞れて

曲水に秀句の遲參氣色あり

雛合

とり合せ目もみえず成て哀也

桃

關守は〳〵いづこもゝのはな
四五尺の桃はなさきぬ草の中
神垣にもゝみる里はなかりけり

ふし見にて

桃つら〳〵花盡る處水長し

梅さくら、多く名のために めぐりを圍れ、あら垣結そへ、將世に朽なむとする程若やかにうゑつぎなどせられて、人のため又苦しき類ひ歟。

桃のはなひとり古人を名乘せず

堀尾氏が室六十賀

うはさせば桃に王母が影さゝむ
桃の花折手はづれて流しけり
月による氣色ともなくもゝの花
此ごろは夜雨〳〵や桃のはな

華

初はなや花の邊の落葉かき
花のもとたちされば四方は夕曇り
土佐が畫の顏に扇やはな見幕

雨日花鳥(頂ヵ)山に遊ぶ

中〳〵に寒きぞ花にたのみある

鴨の下流水樓に遊びて、廿日の月霞いと深く負ひてをぐらく、さしのぼるをみて

春の哀れ花の東に見る夜哉

洛東寺院に遊ぶ

はなざかりさゝらに狂ふ聖あれ

東山の花見にまかり、やすらひをれる程、雨のさゝと降出ければ、手にあふもの引かづき、我も人も木がくれぬ。

花人をうづみてひとりまつの雨

夕雨やはなのあたりをうちかすみ

ものなしが世を行形に花見がほ

都貢が宮所に赴くを

華を踏て岩に角なし鈴鹿山

宰馬が一周忌

花鳥の中も亡日はめぐるかな

故常が父身まかりける悼

春のはな法ッのたすけとみるまでぞ

維駒が別業に遊ぶ

花に來て我は都のたらしかな

再び家の國にかへりて

華は根に我に五尺の地を得たり

入門の其風于當によす

おもへたゞ心はなれてはなもなし

大脇謝大いたりに臥て四十余日、復せずして沒す。我相ちなむ事四十余年、悲しいかな。共に客中にありて夜に日に抱きたすけ、終に臨終の唱名をすゝむ。嗚呼、天年とあらば、さすがに交情の思ひたれりとせむか。其友を待て柩のうごかざりし遠きためし、今日唯今の上にもしからん。悲しい哉。客中鳥雀屋をめぐつて其靡曖〻。于時天明壬寅二月廿日於二東武一亡命

哀傷櫻十詠

野送りして歸りあひけりはつざくら

目にいたきけぶりの末やゆふざくら

夜ざくらにむかし泣よるひとり哉

風のさくら祈も終に見直さず

雨のさくらきのふをおもふ現人

さめ〴〵と涙ふくめり朝ざくら

嗚呼さくら枳ともならで江の東

かはり果し杖よわらじよやま櫻

きさらぎの有明ざくら見果けり

をらばをれ遲かれ疾かれ散さくら

双が岡懐舊

華と我とわれと櫻の影ふたり

鈴鹿山にて

深山路やさくらは花にあらはるゝ

山中辻堂に題て

千日の櫻さき出ぬ叩鉦

鈴鹿峠は伊勢と近江にさかふ

花のうへに海少あれいせ櫻

寒くあれど走井のさくら咲にけり

嵐山

けふ來ずばきのふの花のあらし山

花に歎き又花を呵す天龍寺

戀〻とはなにしづめり嵐山

日くれて稲荷山にあそぶ

散をこそ夜のさくらの誠なれ

やすらひの花よ踏れなあとなる子

春も三日立ぬ。つと鴎巣を訪ひ侍りき。主は梁塵抄なむ頷の邊りに押當、轉寐をれりけるに

西寺のさくら告來よ老鼠

下臥やさくらをいだく月の暈

半天やさくらにかゝる月の暈

廿年を經て老婆に逢ふ

散につけさくらにとしを語り合

ちるは〳〵嵐に峯のはなのこゑ

遊台嶺

うへもなき此世のさくら咲にけり

をとつ日の花の中より遲さくら

枇杷園中花見

ほつとりと咲しづまりぬおそ櫻

磯山やさくらのかげのみさご鮓

影すむやうぐひながれて散さくら

我に續でうろたへものや夕櫻

園亞相公の御前に有ける日

[illegible]

きを、紙におしたるまゝにたびたまひける時

むかし今のにほひいたゞく櫻かな

寛政庚戌二月、みよしのゝ山ぶみせばやと思ひたてるより、くつあゆひ片結びに結びもあへず、先佐屋とまりに仙兒亭を驚かし、旅心定れば

家さくら有明の月とみて立む

みよしのゝ山踏してはるかに、

南帝の御廟を拜しけるに、納言宰相の名をだに見る影もなき叢に埋めば、往事罔兩とし、幻にむかへてたゞ恐みかなしめるなり。

鳥聲を呑て地に有春の雲

いがひ瀛の里を隔し櫻の渡しをこゆるに、山は遠からず近からず。妹なり背也心通はして

山鳥のねに行かたやよしの川

事紅子東行をおくる

君きそと待か御坂のおそざくら

東行留別

この別山ぶき鈍くふち愚なり

宇都の山にて

うつの山一日春と別れたり

行春やつひに根付しさがの松

ゆくはるや駈出しがほの古兜巾

風おもく人甘くなりて春くれぬ

どちへ行雲とも見えず春一日

春をしと見やれば落る木の葉有

とりよれぬ春の行方や雲に鳥

生洲に遊びて

鱗(うろこ)や翌(あす)の命をくれの春

春の名殘水(みず)がくれて香はよもためし

はるといへど火ともすほどに暮し哉

倫五が一周忌

新茶古茶夢一とせをかたる日ぞ

春は行何やらひまの明ごゝろ

夏之部

更衣

更衣ひとり笑み行座頭の坊
更衣いきたうなりし隅田川

まり子にて

更衣まづ宗長の塚に詣ッ
袷買ふて京を出たり妾もの
幸の謠講なりころもがへ
酒飲の膝畳過ぬ更衣
むかふ齒のひとり落たり更衣

武蔵の玉川を越る日

玉川の浪かけてけりころもがへ

よしのゝ山廻りせしに、清閑忘れがたきは、圓居の舊栖、とく〳〵の清水。

かへをしの衣や苔の露しめり

郭公

ほとゝぎすも友と風りさわがしき

郭公野山をものに戯れす
時鳥なき行、夜半の一かすみ

長安万戸子規一聲

ほとゝぎす南さがりに鄙ぐもり

東都の子規ハ啼かさなりて

風情おとれば

かつしかに行てきかばや郭公
かはかふの聲やつゞきて時鳥
蜀魂古巣は泊瀬かみよしのか
ほとゝぎす翌も忘れな槇ばしら

都貢が挽歌

ほとゝぎす棺に物を書やらむ
子規憎しとおもひ捨し夜に
時鳥遂に憎しとおもふ夜や
日頃經て鳴日に疎し郭公
ほとゝぎす聞おくるゝも今幾夜
ほとゝぎすあらしにかゝる夜の聲
聲くらし人まどはせのほとゝぎす
子規啼やぬなはの薄加減

故人台界子は、もと錦おさへもしつ、くつばみかいとらへし友として、しかも道の兄なり。ひとゝせ我身上の變にかゝりて、他の國にさすらふ事廿とせまり、亡人帯て俳諧にすゝみ、一派に名あり。我再び郷に歸る。台子沒す。されば一旦一夕雅情をまじへざる、千歳の遺恨是也。其男倚青子繼て風流にすゝみ、道を予に隨て學ぶ。道の巧拙をもて靈、不滿の白眼するとなかれ。予ひとたび天下の會頭と成て、嘆けれども名四方に有。是をもて足れりとせよ。閑、ことし今月忌辰にあたつて孝子倚青舊知を催し、法莚の俳諧をつとむと、頗懐舊に不堪。往事渺茫三十余年。

ほとゝぎす返せむかしをしのぶ山
子規啼や有磯の浪がしら

郭公鳴や虚空を大ごゝろ
蜀魂ひるはねぶりも落ぬべし
曉に魂入ぬほとゝぎす
十日ほど淡路をさらず郭公

天明己巳二月夢想　一朋二句
御庭上の二樹　此所夢中に不調

橘やまたうへもなきほとゝぎす
花さくら時に左近の子規

六月八日大津より古(小ヵ)
關越えして初て郭公を聞

うぐひすのみだれごゝろやほとゝぎす

焦尾慕前

逢ぬうらみ血を吐までぞ郭公

得がたき香木一片をわかち
給へける菊溪の主へ申送る

うすけぶり雪にきくかなほとゝぎす

閑古鳥

ほろ〳〵と夏の落葉やかんこ鳥

客中

閑こどり我行かたへなきうつり
かんこ鳥啼や花なき野にもあらず
人見ずば汝(なれ)もなくまじ閑古鳥
草ぼこやゆふ越えゆけばかんこ鳥
都鳥の我を呼かも松の奥
我に答ふ聲ともきけり都鳥

牡丹

華暮て月を抱けり白ぼたん
はなやかにしづかなるものは牡丹哉

罌粟

かげろふにゆらるゝけしのひとへかな
露たかき麥の見こしや芥子の花

銅駝殿中にて俳諧つかふま
つりける日、老人白圖が此
道に志深かりけるによりて
居士と申事、
台命にまかせて

龍居士が衣に倣へひとへけし

嵯峨にて

しら芥子に焚火移ふや嵯峨の町
汐かぜや砂ふきかゝるけしの花
めら〳〵と火さゝば燃む一重芥子
けし咲て並能(よく)なれば散初め

杜若

鼻紙に足ふく人や杜若
鏡立て見ばみむ花よかきつばた
むかし女はらからすめり杜若
わりなさや道〳〵開くかきつばた
すつかりと切ものにしてかきつばた
かきつばた穂麥の髭に立ならび
芍藥やはきもの失る水驛(みつうまや)
芍藥に甕(もたび)すゑたる旅路かな

夏草

壁やれて有たけ草の四月哉

宰馬が身まかりけるを悼(壬寅三月)
廿二日に命四月
四日東武に告

死のみちや我も百里は遠からず
あはれ野や五形にもどす花の露

卯の花

卯の花の草にかゝれりにはか水
うのはなの中行蓑のしづく哉

山家にやどる

うのはなや妻木が中の爐の明り

夏野

麥かれて夏野おとろふるけしき哉

麥

宵闇ぞ最中也けるむぎの秋

灌佛

花御堂實僧が工ミ凡ならず

一夏

はつ瀬山一夏詩病僧あらん

短夜

みじか夜や人現なき茶師が許

月は月夜は短夜と別れけり

短夜やいつ葬のかいわり葉

松魚

冷酒一盃　鮮肉十片

板の間のはな盛人よはつがつを

又嬉しけふの寐覺ははつ鰹

鰹よぶ浪よあらしよ屋かた舟

茨祭

下ミの下のかざしもあふひ祭かな

若葉

花七分若紫にわか葉まず

人媚て朝宴す新樹陰

わかばして浮世に心うつり哉

若葉山ほとけとみしは古狸

雨雲のかき亂し行若葉かな

わかばして水とり雲のいそぎ哉

葛のわか葉吹切て行嵐かな

夏木立

雪を嚙て一峯こえぬ夏木立

夏雜

みどり長く夕雨廻るあらし山

桑葉こく盲かはゆき蠶飼かな

伊勢世義寺にて

水札の子の淺田に渡る夕かな

筍

牛舟やたけの子時の佐渡便り

笋やひと夜にかつぐ八重葎

若竹

わか竹は月に養ふけしきかな

若たけや一宇の灯深からず

百合

草臥や百合になぐさむ鳳來寺

空ざまにゆり咲て日を禀るかな

金銀花

見る人のみるものにせよ金銀花

蓼

針の有こゝろに蓼のほそ葉哉

安也免

きのふ見し妹が垣根の花あやめ

花あやめ五尺の露をあぐるかな

はなあやめ五尺蔓りの薄匂ひ

蟹取歌

蟹とり〳〵澤蟹の

さわたるきはみさわたりて

澤の小つゝら花あやめ

あやめしどろにふんとろん

扨しもいくら狩得てし

子をとられぬるおや蟹の

八ツの足ずりあはれしも

龍泉の水を出て、さゞれ石の巖に甲を並べしが、今は龍門の泥に眼をぬぐひて、鋏いと鈍からむ。靡あらば汝あなうと音にも鳴らし。

子をとられぬる親蟹の、泪や泡と吹ぬらん。仇かは腰の黍團子、蟹取〳〵猿が島をおもひしるらめ、思ひわくらめ。

夕雨やをかに出揃ふ蟹の穴

端午　淺香にて

かつ色やかつみかけ行負具足

客中

あやめかけて草にやつれし枕哉

一町の貧者先だつのぼりかな

草の戸のくさより出て蓬ふく

藥玉

藥玉やむすびてひさるみだれ箱

粽

粽はけて淀のゝあらしわたるかな

競馬

くらべ馬神たのみとぞみえにける

埒明て目の塵はらふ競馬哉

竹醉日

竹植て注連にさすはや琴の糸

（「三傑集」に「さゝばや聖の給」とあり）

竹うゑて元政坊をおもふかな

女子をうしなへる沙漠を悼

辻がはな目なくなりたき思ひあらむ

帷子

かたびらに松葉さゝるゝ空寐哉

五月雨

塩鮭のあぶらたるなり五月雨

行方なき蟻のすまひや五月雨

五月雨やひとりはなるゝ弓の弦

文車や寄ては返すさつきあめ

さみだれや岸の山吹ふりしづめ

鳥の子の卵出しより五月雨

燐（フヒ）ともしらでなつかしさつきあめ

五月闇

しら紙にしむ心地せり五月やみ

蝙蝠

かはぼりや古き軒端の釣しのぶ

蝙蝠や月の邊を立さらず

蜀

實なき夜學と見ゆる蜀かな

蚊

蚊ばしらや棗の花の散あたり

かの聲の夕に雲をおこしけり

利は得べし、むさぼるべからず、世上の人

樂しいか打手（うつて）の下の蚊のこゝろ

蠅

唐までもうつり行らむ蠅の足

はへにくしこゝろの先へたち廻り

丈芝坊がみちのくへ歸るを送る

二とせや身に添ふ蠅も打て去（ル）

伊豫の國松山の蘭芝、大和の國廻りして再び都に歸りのぼり、兎もし角もし書集め日記やうの物を見るに思ひさす端〻、能意に協て聞ゆれば

袖に見むみよしの〻蚕三輪の蟻
蚕を追ふこゝろや唐のよし野まで
株木瓜や蟻の巣作る五月山

蜂の讃

身の露の甘きには似ぬこゝろかな
繩なる身のたのみより蜂おこる

安達が原

黒塚や蚋旅人を追ひまはる

蟬

初蟬や初瀬の雲のたえ間より
薄雲の山路をすますせみの聲
せみ鳴て梢の蛙おちにけり

螢

ほたるうりすゞしの頭巾着たりけり
螢三ッ二ッはものゝなつかしき

舟中

盃のうへに吹るゝほたるかな
いふことのきこえてや高く飛ほたる
螢火や風の笹山吹おろし

瀬多石山のあたりの螢を狩

て、はる〳〵人のつとに得させけるを、日頃籠にやしなひ夜毎母のながめに備置つれど、ひたと死うせけるを悲しみ給へば、ある夜と〳〵く籠をふるひてはなちやるとて

魂ならば歸らめ草に行ほたる

水雞

水雞啼宿とこたへり妾もの
我やどの澤潟さきぬくひなゝけ

蝸牛

たのみなき角としおもへ蝸牛
おもひ得たり竹三竿にかたつむり

蟇

深草の鶉ともならでひきの聲

田植

田うゑ女のころびて獨かへりけり
かづらきの皇子よりや奥の田植うた
酌つゝや奥の田うゑのにひしぼり
つらり〳〵うゑ田の緣の百からす
我ものに植田の蛙啼つのる
つまなしのさす手引手や早苗舟

越の磯輪づたひに

さをとめはみな海士が家の出立かな
海士が業濱田のさなへとりにけり

さをとめの讃

鴉の巣に吹とらるゝな田うゑがさ

紫陽花

あぢさゐやよれば蚊の鳴花のうら
紫陽花の日和なるべし村ぐもり
あぢさゐに喪屋の灯うつるなり
紫陽花やおもひ忘れし跡の色
あぢさゐや畫も蚯蚓のくもり聲
とりよれぬあぢさゐ花のこゝろやな

蓮

葩を葉におく風の蓮かな

清水

草あらふ流の末や苔しみづ
汲てしれ命にかゝる苔清水

此奥に聖おはしぬ苔の花
桐のはな寺は桂の里はづれ
色に香に桐控(クツロ)してはなに凝(コル)

鹿子

さをしかの子を立かくす箭先かな

鵜川

山本や鹿の子迷はす鵜のかゞり
曉は寒いやうなりうのかゞり
はなれ鵜の火を得さらぬも泪かな
雨一時うのかりなづむにごり哉

覆盆子

山ふみの錫にかけたり莖いちご

李子

李子や供笥(ケ)をこぼるゝ敷かはら

栁の花

鞍つぼに酒吸ふ門やかきの花

志賀の山ぶみして

澁かきの花ずり衣名のりせよ

樗

鮮うりのかざしにとれや花樗

漉水の雫かすりてはなおぼち
菰鞍の見せ馬たてりはな樗

五月十四日也けり。故もなく餅搗まいかと人〻がいひあつまりて、二日三日搗

青梅に臼まはしこむ餅あそび

青梅

十ヲたらず野中の梅の黄〻けり

海松

浮海松のしほよりからきよるべかな

藻花

藻のはなに水とり雲のかゝりけり
もの花や引かけて行ぬれ鐙

萍

萍や夜は稲妻の只をかず

麻

すは〳〵と夜は明安し麻畠
麻かりや白髪かしらのあらはるゝ

夕貌

ゆふがほの花立されよ夜の蠅
夕貌のはな踏盲(ムム)すゞめかな
ゆふがほの華曉にうち見たり
夕がほや花の外には露ばかり
ゆふがほのはなをちからや木曾の奥
夕がほやあからさまなる闇むしろ

昼がほ

ひるがほは酒をのむべきさかりかな

瓜

初うりやまづ畑ぬしの茶振舞
瓜ばたに月夜の株瀬守りけり
冷し瓜宇治の堰(セキ)にかゝりけり
瓜の香や逢たき人の跡座敷
むだばなやわがねて仕舞瓜の蔓
干瓜や汐に流れしうつせ貝
ほしうりや身はかた〳〵の汐衣

一度他郎、我名の他郎とつく。今法師身まかりけると京にありて聞、句を尾の連衆に送る。是をもて一回忌

の俳諧をなす。

我名ひとつ枯て露けし瓜の蔓

氷室

鳥飛に倦て氷室に落すかな

氷室守龍に卷れしはなし哉

蘭芝、假に居ける桂輪亭にて

日は氷室夜をなけ加茂の川ちどり

雲峯

ふけば散ものゝ冷まじ雲の峯

白雨

夕立や只一押に野べの灰

見つゝゆけば夕立きえぬ清見潟

白雨や鼠集に死ぬ茶木原

夕立や一棹岸へたらぬ舟

天明はじめ丑の年六月二日は、平相國信長公の二百年にめぐりあたらせ給ふとて尾張の國總見禪寺に懺法供養を、との外にとりおこなはるゝを、はるかに聽聞つかうまつりて

けふの御法鳴いかづちも草の露

暑

糸ぐちのみだれて暑き手もと哉

遊行、日の岡に到て感慨懺悔

世の中の汗は石にも轍かな

よにふるを何にたとへむぬれ扇

六月の埋火ひとつ靜なり

夏雲

みちのくの完山、今年蕉翁百回の法莚にあはむと、都にまかりのぼりて一七日の俳諧をつとむ。嗟〻其信いふべからずと、都鄙群集の風客涙を揮て是を感ず。花はおほよそに盡し、青葉がちなるより都を立はなれ、しばらく雲の龍門にとどまる。日ならず又行裝を皆ぐ。去年はみちのくに巢

我を送り、ことしは暮雨莊に我かれを送る。渠も老へり、我もおいぬ。けふの離別一千五百里、今世の再會期べからず。

世のうつゝ隔てあはむなつの雲

懐古

大坂や霜幻の夏のくも

鼾の圖に

いびきの圖夢のうき橋とみる世かな

納涼

夕すゞみ紀の岸や崩らむ

竹涼し故人迎る意あり

すゞしさや脚さげて行夕肴

丈芝が薙髪せし時

髪の落見れば涼しき泪かな

針させばすゞしき鯛の眼哉

五明樓夜坐、殘宴又はじまれり

すゞしくも明行月を照日かな

はだか子に乳の毛ひかれて夕涼

草の戸や柳すかして夕すゞみ

みちのくにて

陸奥殿の涼臺なり千松島

夫よりして人のまよひや川

涼　と彫門がかつぎ出るに

次

水晉や琴を下樋に夕すゞみ

腹赤き蟹つり出さむゆふすゞみ

簟

廬山寺の僧似合しや簟

冷酒

塩鳥の齒にこたへけり冷しさけ

冷さけや一順果し廻りはな

祇園會凝雨樓對酌

山おろしの風みどりなり唐錦

月鉾や人聲起る山かつら

己、湖南幻住庵に在て、故郷に父を失ひし臥央を悼。

眼にいたき風も吹つらん蚊やり草

此日は六月晦日也けるが、

我はらからの者獨は三十三回、今獨は十七年のけふに當りたりければ、月を同じう作善をいとなみ、何くれともものかなしき今宵也けり。

うつせみや何を活甲斐に我はたゞ

かなしびにひかれてかなしび侍るなり

沖鯖

沖なますはやきをもつていさぎよし

御祓

追かけよ五申にかゝるひやし瓜

曉臺先生發句集　下

秋々郊

日ぐらしの今朝しも鳴ぬ秋は來ぬ

鶯の淺茅かくれや今朝の秋

ころ〳〵と轉り出たり露のあき

芝前の箭拍子さえてけふの秋

初秋や友まして夜の靜なる

けふの秋死とも聞し人にあふ

知多の浦一草亭にやどりて

けふといひし秋は今宵の五位の聲

丈州が身まかりけると聞て

秋二日身をそぐ風も吹ゲばふく

士朗信濃に別るゝ時

うつせみの現に秋をしる日かな

七夕

萩桔梗星に貸べく野は成ぬ
廂ひめのをしへ成らん貸小袖
玉簪のはなに迎む星のねや
竹取が由縁なろむ女七夕
龐居士も娘もちけり天の川
江にそふて流るゝ影や銀河
戯にあふぎながさむほし迎
さす汐や玉藻つかねて星むかへ
廿年あとのまつりやほし今宵
ほし逢や我は嬉しき親になひ
星あひやものめかしたる不二筑波
七夕や世に大かたはまさな事
さゝまくら星に一夜の名なるべし
ほし逢や心の友は伊勢小町
病ばたゞまくらの上ぞほし祭
星今宵夢みてはらむ人あらむ

酒星あれば地に酒泉なからんや

七夕や流るゝほしは酒くらひ
羅の袖や裂らむわかれ星
明がたや七夕づめの閨の雲
別れ星今は木隠れて見ゆるなり

ひとゝせはせをの翁、此國をたどりて、うき身の宿てふことを雨にそへて、かなしみ申されしを、ふと星の夕に思ひ出て

下り帆にほしや迎ふる浮身宿
星の精や八日にさける白芙蓉

文月十日、國に、中將の君うせさせ給ひければ、民の心灯火盡しやうに昏闇し、歎ひ慎しみ、蠶して悲しみ奉るなり。

おしなべて月なき盆となしにけり
草まくら故郷の人の盆會かな
盆ごゝろ夕がほ汁に定りぬ
蜑の子や何はなくとも盆扇

貧家

たま棚にくさのゆふべのけぶりかな

題　魂棚

鼠尾草や身にかゝらざる露もなし
美しや月の中なる盆の人
盆の月市に隱るゝ人は誰
送り火やなきは誠の跡座鋪
魂送り身にそふくさの夕かな
靜さや町なき里の高灯籠
つくゞゝと雨見上るや高燈籠

踊

おもひきつて出れば出すますをどり哉
まくり手が踊崩してをどりけり

唐崎へ御渡ゆか、山田へ舟をやりゆはん歟。

秋の風三井の鐘よりふきおこる

秋風

秋かぜや火燈しのぼる浦の山

滿山秋雨の時、春風落花を おもふ。

秋かぜの吹につけても長等山

巣に籠る蟻のいそぎやあきの風

あき風や鷹に裂るゝ鳥の聲

秋かぜや鷹飼そむる酒の君

藤の實の鳴出しにけり秋のかぜ

あき風や寄かひもなき竹柱

市にふる鯛の尾かれてあきの風

井澤(石和)といふ所より竹の下こえに行。此ゐさは川は鵜遣ふをのこの貴き御法にあひし經石など、今もたま〳〵拾ひうる人もありといふ。みさか峠越てあやしき田家にやどる。

猪垣のむすびめきれて秋の風

客中

切角と野分追ゐる旅ね哉

左中將城破れて、洪鐘此金ケ崎の海に沈しと言傳れば

鐘はふかし浪近ければ秋の聲

木曾古城

水は日の西に落けりあきのこゑ

瀧谷慈光禪寺は澗をめぐりて入と三十餘町、雲霧の中をたどり、はじめ楠氏が三男庄五郎入道が禮正禪刹にひらいて、風水清音に終りをとれるのみ。

雲起て寺門を出る秋の聲

稻妻

鉦の緒にいなづまつかむゆふべ哉

露

酒くさき人の寐がほや松の露

夜前亡人斗拙を夢見

逢ふはうれし夢絶てのち露を呵す

淺草の街に假にかりほして、月をかさね住居れるかたを、元のぬしへ返しあたへ、塑れば引はなれて又東の國わたらひす也。人〻かくて其庵す丞置べきよしなしとて、やがて跡なくかひほどき、暫、鶉なく野等となもなしてむとぞ。すはされば檀の柱つれなくも我をわするらん、軒のばせを葉あだにものゝあとつきやすきうらみのはしくれに思ひ詫て、それさへ今宵のかど也けり。

けふは我墨は庵なき露のはな

木槿

もとの露すゑのしづくや花木槿

日の照や一雨殘るはなもくげ

蛋ふるふ願人坊や花木槿

二日唉木槿となりてあさ寒し

白木槿糸瓜の中に唉にけり

散柳

柳ちるや少し夕の日のよわり

女郎花

信濃の道下り、甲斐のさかひに入

川風のうつりも行かをみなへし

秋かぜをかつぎてふせり女郎花

をみなへしあやうき岸の額かな

朝貌

傾城菌梅てふをみな、つくし琴の曲あやしきまで妙なりけり。極て夜明なんとすをり〳〵、かきならすわざをこのめり。鳴らせば必玉うつ靡草の上の露を飛ばし或は閑怨の情を動かし、忽閑雅のさかひにいらしむ。

明れば又青樓上

あさがほの蔓もすくふか琴の爪
葬はいなづまに見る苦かな
ばせを風過て朝がほのさかり哉
朝がほのはなこそみゆれ奥山家
あさがほの花はぢけたりはなひとつ

桃明をいたむ

露はら〳〵槿に翌のたよりなし

月くさ

野上にて

月くさの野上とやいはんよしもあれば
月草の色見えそめて雨寒し

月くさは露もてはなをくゝるかな

霧

伊勢の山田のみの手やといふに、人ゝとゝもに酒たうべ遊ぶ。園のめぐりいときよらかに、東うちひらけて先朝熊をいれたり。このもかのも皆此亭のながめをとりよろふたり。ひとり直下千尺秋色遲しとからびどいひ出たる有。よくいへり、

誠に直下千尺

霧色あり百樹の上に酒吹む

山中

霧にぬれて我酒は酢し塩からし
きりこめて那須野狩野の犬の聲
霧雨の降崩したり餓鬼灯籠

亡母野送り

霧煙今や骨ならむ肉ならむ

收骨

露肉なし目もくらまりて相狹
初七日

はな芒九品のおまし告たまへ
なき聲のこゑ耳にあり秋の風
うつり行日に衰へて夜は長し
かはる夜や心寄せなき秋のくも

有喪中

萩

風なぐる萩の鈇山日のかすり
かぜなりやうち返る萩のほの白し
しら蟻や水打越えし萩のうへ
色みえて萩のり越える燃しかな
はぎ原や花とよれ行爪さがり
小比丘尼の折て捨行野萩哉

鳴成

一夜とめて向ふ柱のこぼれ萩

桔梗

桔梗咲て何れも花のいそぎかな

芒

犬の聲しばし里ありてむら芒
はる〴〵と雲のかけりやむらすゝき
色もなく水おしかゝるすゝきかな

夕闇を靜まりかへるすゝき哉

長絹の紫かゝるすゝきかな

あらし立夜頃の芒黄みけり

蛇のきぬかけしすゝきのみだれ哉

日も寒氣たちぬ芒の花の上

村をばな夕越えゆけば人呼ふ

むらを花夜のはつ〳〵に鶉啼

を花散や鬢の毛を吹風の筋

蔦

上總の國を行脚して山邊といへる所に出づ。かの赤人の古墳も拜みてやゝ過る程山邊といへる名のおもひすてがたくて

つたの葉の水に引るゝやま邊かな

蔦たれて千尋尋見る滴かな

垣のつた濡重りぬへちまの葉

つた紅葉下戸を住する扉哉

蜩

ひぐらしや明るき方へ鳴うつり

蜩のなけばひさごの花落ぬ

日ぐらしのなけばつら〳〵古郷を思ふ

蜜(密ヵ)清淨の闌若にのぼり、午時一睡清閑に入。

聲しみ〴〵浮世に遠し秋の蟬

秋蝶

秋の蝶日の有うちに消うせる

秋蚊

あきの蚊や香の烟の前を行

秋蠅

蠅たゞに死ぬ日をみたり秋曇

虫

鈴むしの鳴やころ〳〵と露の玉

すゞむしや手あらひするも蒔繪物

轉蟋蟀

寒き聲や敷居をくゞれきりぐ〳〵す

きりぐ〳〵す目のさすまでの古むしろ

琴爪を鑷にうつやきりぐ〳〵す

寐ぐるしや鳴そなゝきそきりぐ〳〵す

二日見る佛の飯や蟋蟀

立出て鎖せばあとはむしの聲

夜あらしをあぶせかけたり虫のこゑ

曉や雨も頻にむしの聲

たよりなや水押かゝる虫のこゑ

常盤塚にて

虫の音や美人の涙いきかはり

秋のまと虫ほどに鳴物はあらじ

亡母三回忌

みのむしのさらに裏籠る思ひ哉

くつは虫いつかはかなきしもの聲

秋雲

しづけしや鶴に定るあきの雲

あら浪や波を離れて秋のくも

秋水

秋の水竹の根がらみ流るなり

あきの水こゝろの上にながるなり

茫〻と芒折ふす秋の水

黒血川

かくばかり秋の色またあきの水

秋寒

二日咲木槿となりて朝寒し

秋寒し立出てみれば袖の浦

よし田山中砂走などいへる所は裾のゝはしりに、家づくりせし村ゝなり。芭蕉翁、武陵天和の變にあひて暫留錫ありしも此あたりなり。

山中にて

山がつの願とぢるむぐら哉　翁

川口にて

勢ひあり氷柱消ては瀧津魚　全

雲霧の暫時百景を盡しけり　全

是等の吟をとゞむ。百景盡すに今猶不盡、夫より山深く入て

秋寒し日蔭のかづら袖につく

足がら越にかゝる古道、草をむすんでしをりし老樹枝乾て自寒し。

秋深し松はむかしの具足すれ

篠の中道胸わけしてやう〳〵東海道梅澤のさとに

いづる

さゝがに姫といへるみめあしき姫のいまぞかりけるが、糸のわざにはいと妙なるまでたくみなり。しかあれど織姫などのあやにものなす類ひにはあらで、色ある蝶の翅にかけ、玉むしの玉の緒もそがためにたえてん。只ものねたく心恐しければ、ふつに戀わたるかたもなくて、身をいたづらに葉がくれ、やゝ秋風の秋にあひて、ひとり夜寒のわびしらにまぎれ出ぬる折ふしは、あいなくねどころに火さゝれて、うきをさへえなかずて逃まどひつゝ、いづちにか住果てん。世人の上にもあらんかし。

しみ〴〵と夜寒き蜘のあゆみかな

音になかぬこゝろたくみや夜の秋

椎の實の板屋を走る夜寒哉

海近き雨や夜寒の濡むしろ

影見えて肌寒き夜の柱かな

秋野

秋の色野中の枕のによひと立

あきのゝやはや荒駒のかけやぶり

秋山

秋の山ところ〴〵に烟たつ

雨三粒降て人顯るゝあきの山

きのこ

雨はやし松茸山のすてかゞり

おくれ馳に魚さげゆかむ菌山

松茸や小法師どもが朝はやり

まつだけの灰やき寒し小のゝ奥

八朔

八朔や旅は寐がちにもの忘れ

田面の日壽ぶく馬醫の家婚哉

相撲

神妙に古き代したへ角低(觝)士

亂髪風情なるかな勝角力

寒ければ衣着にけりすまひ取

すまひとり死なで歸れり伊達の木戸

三日月探懐古

大曾根の成就院、今は悉皆頑度(?)佛跡地を返して稗粟畝をたゝみ、彼三日月の碑はものゝ隅に押入、うしろざまにすゑたるなど、いと哀に覺えて

ありとだに形ばかりなる三日の月

蜀黍の穗首になびけ三日の月

六組讃

三日月の光さしけり精米(しらげこめ)

八幡宮千百年法樂

若みこや月にかげさすをとこやま

月

狼の吼うせてけり月がしら

月みえてふり替りけり浪頭

けふの月雲井の龍よ心あれ

獨坐

月と我と物おもふ頃雲おこる

仲秋無月

月や雲跡よりせむる雨の聲

月の匂ひみちたり雨の高砂子

うちむれて詠むともなしけふの月

大かたは美女なりけらし月のまへ

夕がほも地に見えて月の今宵哉

月滿て芙蓉の花のすわりけり

折箸に萩垣ほどく月見哉

田鼠のわらひ出たりけふの月

酒喫(クラ)ふ蝦夷もくもらじけふの月

人遠く水長うしてけふの月

杜若又さく水の月夜かな

石山やのどかに出る秋の月

さをしかの角にかけてや峯の月

地はものゝ懐せましあきの月

大空や月はこゝろの上に置

月見して餘り悲しき山の上

雲はやしいろ〳〵に月を過す哉

けふの月橘色に出る夜ぞ

月の隈十圍の杉の匂ふ夜ぞ

月の桂かたむけば又あらたまり

まどかにて二夜も三夜も秋の月

香千里目にやしむらむ秋の月

北海

月ひとり荒海をすゝむ今宵哉

池邊

人をいかる遊魚あるべし水の月

良夜滿興、川原乞食に酒のませて

月に酒おのれしのぶの亂萩

曉月鞍上吟

夜すがらや曉の鐘にけふの月

湖の面雨むらふりて月をうつ

仲秋ふたむら山にのぼりて

奥山は霞雲なりけふの月

口ずさみに

あらし吹雲のかよひにたちくれて

わけ入みちも二むらのやま

大阜は父に別れ、我は母を失ふ。ともに仲秋喪に籠りて

思ふ處ふたつなき夜の月くらし

ひとりこよひの月に對すれば、おもふ所とし頃睦まじかりし人々の八九は亡失せて、とありかゝりとたゞ其俤をむかふるのみ。已いそぢもこえたらん齢のほど、ことしや月の見果ならん、けふや清光の名殘ならむかと、去年は旅寂に一入思ひ入て、袂の露も深かりけるが、何くれと同じさまして又この秋にも逢るなり。さてしもつれなき命ともおもはざりき。

大かたは逢ふまじと見し月を友

十六夜のやみいよゝ降くらしつゝ、誰〳〵も戸さし、うちこもりて去年今年など言くらべ、とぞりゐけるに、ゆくりなくの月の光さし出たりと人のおどろかしければ、そこらおしひらきて

中天をいさよひの月の出かけ哉

風かなし夜〻に衰ふ月の形

早稲の香や藪を一重の畫談議

いなご

道のべやいなごつるみす穂のなびき

野徑

月よしと小棚(小水葱)をのぼるいなご丸

秋雨

山鳩の脊中干なり秋の雨

秋の雨深草の町に行かゝり

あきの雨胡弓の糸になく夜哉

秋の雨ほね迄しみしぬれ扇

秋の雨懶きかほにかゝるなり

(原註しぐれィ)

信濃の道くだり、甲斐の國に歩みを引ちがへて行ほど、藤田の可都里は年頃文してしれる好人なれば寄ぬ。其夜ごろにもあれば、月を見せばやなどわりなくとゞめられ、望の夜もこゝに遊ぶ。士峯の北面まぢかくひたひにかゝるやうなり。

高根はれて裏行月のひかり哉

今宵空のきよらなる、十とせにだもえこそ覺ねなど、誰かれと共に夜更るまで興ず。

堪すしも薄雲出るけふの月

あたり近き市川へまねかれ社司盧南子のもとに、むかし新羅三郎より給りの、ゆへよし正しくありて天國の劔を重寶す。謹て拜見す。

秋の霜三尺の龍やこもりぬる

其餘にも亘勢大納言の畫は輒朝公の賜のよし。今千歳の家名をかたぶけず、國にめで度譽なりけり。酒折の神社は甲府の東はつかに去て、山の邊にたゝせ給ふ。

こは日頃まうで侍る我國熟田のおほん神と一躰におはしませば、羇旅のうへたもともぬるゝばかり、猶有がたう覺えてぬさ奉る。

小墾田のをはりの初穂かくもあれ

客中

我きけばをはり田をさす雁ならし

甲斐の國市川なる蘆南子がもとにやどれる夜は、しく〳〵雨の降出つ。空は月の出づるかも、うすあからみたるに、雨いよゝふりつのる。夜坐倚しづかにおもふ所感あり。

雨くらき夜のしら根を鴈わたる

甲斐の國道くだり、いぶせき山中にやどりて

いつの世はとありとしのぶふる里を

ひとり門田の月になかるる

此國の夷等道のほどをしへ迷はしなどしければ、あられぬ方に日くらしたり。いさゝかも情あるやう見えざるも又哀なり。

道くれて稲のさかりぞちからなる

東方天の極れるや、海の極れるや、神といへどもはかるべからず。仙といへどもしるべからず。

星盡る處まどかに出る月

途中

歸り來れば淺田の早稲田穂にみゆる

風行や濱田にしらむ穂のなびき

稲の香のねざめて近し五位の聲

引狼の田守をにらむ庵根哉

ひたぶる船頭に句を乞れて

川稲の香とりをさして潮來船

わりなしや法師夜田刈月の前

色ふかし田尻の小梛かくてかれ

唐崎の松に日ざしや秋の雨

鮫の尾の遠く沈めりあきの雨

翌は藤歩子のもと立出べきこよひ、其家の人〻打かたらひて、又くるとしのちぎりなどはかなくいひわたりて、山川百里の情只今にせまる。

心からの雨も降らむ夜の秋

秋夜

秋の夜や力の火かげ跡になる

草の花愁るあきの夜と成ぬ

あきの夜や膝こす水は渉られず

秋の夜もそゞろに雲の光かな

秋のよや心盡しの默りもの

あきの夜やひらき協へし笛の孔

秋の夜は梨子の齒冴の寒さ哉

秋のよや杵おし削る爐のあかり

玉むしの活るかひあり夜の秋

あきの夜やそろりと覗く君が門

擣衣

をとめ子が御衣打らし神の石

遠砧夜のおとゞに聞ゆべし

西谷の衣うつ夜や焙り芋

山姥とみし人きえて遠砧
柿の澁ぬける夜冴や遠碪
うつら〳〵月見つゝあればきぬた打
悲しきは上手なるべしさよぎぬた
砧打てつれなき人を責るかな

鴈

南にも初かりがねの聲すなり
はつ鴈の信濃にかゝる夜は寒し
初かりや高ねを左右へひるがへる
きゝそめし夜より亂れて風の鴈
遠山や身をうちつけてかぜのかり
亂雁となるや靫の雲うつり
やう〳〵と立あがりけり小田の雁

渡鳥

京ちかき山にかゝるやわたり鳥
夕あさり鳴の目はやく鷺鈍し
おのれのみ貪る鵙の眼ざしかな
かけなみに追れて高し鳴の尻

秋暮

犬蓼の節をれしたり秋の暮
鷹の眼の水に居るや秋のくれ

秋烟といふを題して

人の上に烟かゝれりあきの暮
象潟やいのちうれしき秋のくれ
梅干で酒吸ふてみん秋の暮

鹿

山鳥のさわぐは鹿のわたるかも
鹿の聲をばなの末にかゝるかな
こがれてや淺瀬見てゐる鹿のつま
あなう〳〵射よげに見ゆる萩の鹿
こけ猿も夜たゞ侘らむ鹿の聲
鹿の鳴音引結ぶ夢のたどり哉

閑坐所思

ある夜ひとり鹿の鳴音も六かしや
病鹿や霜に狹りし明の聲
鹿追ふや曉聲に雲を裂
別鹿霜の笹山わたるなり
ぬれ鹿に有明の月のひかり哉

九月朔日吾初て知命の日なればとて遂宮へ詣づ。川のほとりはつ穂ひた刈て、道せきまで干置るを、尊く侍りて申。

として又命は續り稻むしろ

菊の九日遊大津舊都

けふの菊なき世の都めぐり哉

きくの日清見寺に詣て

雪舟が筆の走か菊の露
籬菊や花のうら道一通り
山風や板戸たふれて菊の上
痩ぎくや只一もとのまさりがほ
みだれ箱菊折入て參りたり
白菊は露の泉とみゆる哉
しらぎくのおなじ色としもなかり鳧

夜宴菊

月しろし此はな燭を恨むべし

題百菊

華の色香我思ふ菊は只一種

はなひとり黄菊神妙にみゆる哉

燭とり〳〵夜坐亂れけり菊十種

香にふれよ菊のあたりのゑの子ぐさ

十三夜の月は矢作の橋の下に遊びて、かの上るり姫の舊跡にであれば、おもふところたゞ管と絃と、見る所草頭の白露秋靡人語に對るのみ。

秋の花みなうつゝなし后の月

后の月すゞむうちより衰ふる

月の餘波關守あらば菰枕

のちの月客に呼るゝ病あり

十三夜戸塚の驛にやどりて

月にゆかば鐘に夜明む建長寺

古園百里を去て故歩子のもとに二ことせの秋にあふ。しかも九月十三夜なりけり。

雲百里今宵ふたゝび月の闇

九月十三夜もこよひになりぬ。今宵の清興、うたげまうけは好ミ舍中のともがらなり。共に手からみて科野川の支流にのぞめば、獨ひそかに古園の感あり。

水日夜北にせまりてのちの月

十三夜は亡母六七日にあたりて

后の世の月ならば母の影もさせ

末枯

うらがれや西日にむかふ鳩の胸

何草の末がれ草ぞはなひとつ

葛

人目も草もしどろに葛の枯葉哉

葛の葉や篠田(さゝだ)男の蠅をなみ

くずの葉をおさへ付たり秋の霜

紅葉

うす紅葉するよと見ればちりはじめ

門叩狂僧憎し夕もみぢ

何とみても紅葉は松に極りぬ

紅葉散や髪かれて我けふもあり

後ト先に人聲遠し柿紅葉

蓼(蘇カ)芝の滿講

木食のわけ入かたや秋のいろ

三浦氏蛙聲を訪ふ

先門に入れば柑子の色にみゆる

途中

藤の實に小寒き雨を見る日哉

子東三回忌

三ッ栗に中の七日をおもふ夜ぞ

木實

岩の窪衣の袖の木の實哉

夜もすがら鼠のかつぐ棗かな

むづかしや茱萸にからまる蘿蔓(とろろかづら)

茱萸の木のしどかれて行野間哉

洛の夜半主人、幻住庵のかり寐訪れし時

丸盆の椎にむかしの音聞むときこえしに、かたみて月を松もとの山とかい付侍る。

日頃おもひまうけし事ども

とひもしいらへもしつ。月は四更にかゝる。夜のかさねいとうすく、裾引かくし肩おしならべて夢境に入。

曳がしわぶきに目ざめて

曉の寐すがた寒し九月幷

秋雜

秋暑し水札鳴方の潮ひかり

脇さしの柄うたれ行粟穂哉

はなかつら背きあふ野邊の初あらし

野路の雨刈萱獨ありのまゝに

鳩鳴や藪山口のつぶら家

蕎麥の花眞晝に暮ぬ不破の雨

鋭き物のかくは有まじ長瓢

むら雨を面白さうに芋畠

芋黑く竹黃になりて鵙の聲

嶋臺圖に

清げなる老のみさをや竹の春

さし鯖やかさねはいつのはたら塩

水海夕陽

秋のなみ星うち返す折もあり

落鮎や潮の闇に沈むまで

老情旅にせまりて再び白川の關をこゆる

見つゝゆけば茄子腐れて往昔道

志賀の山どえせんと、あられぬ道にまどひ入ッゝ、高萱胸わけしてやう〳〵と如意嶽に出づ。

眞蛇鳴花の古道風かなし

龍膽や岩のへげめの日にうとき

ばせを葉に落かゝりけり鬼がはら

山中や別當殿のことし酒

遇貧夫

肱に一嚢をかけて、はつかに滿るをもて樂しびとする誠に樂しひ哉〳〵。清うして貧し。かくてあらんよりは世になくてあらんなどつぶやく人は、常に金壁に面を照し、銀盞に歌舞せられむ事を事とし、必其患のしり

へに廻るをしらず。そは是常に哀しびを迎る也。たゞ樂しひ哉、清うして貧し。

身のほどや落穂拾ふも小歌ぶし

うらさぶる日、たどり〳〵木母寺にいきて、佛念しッツあはれ成くま〴〵をも見めぐり、日くれんとするほどに、鐘も鳴鴨なきさわぐ。此日は秋のなごりなりけり。

木母寺の灯に見る秋の行方哉

風あらに雨さへ降そひてやや寒し。誰かれも心ひとしう、いざわび寢してんと、むしろの端のやどり乞て臥ぬ。三更の頃さえ〳〵しう空うちきらめきて、型ればゑうめ若の古墳に詣づ。

みの虫を擊ことなかれ落葉かき

すみだ川のわたりにかゝりて、いにしへをしのび今をおもひ、ともなふ人々も歎

く也。我もなく。

日たゞ夜たゞ都をさしてかもめなく

長月も廿日あまり八日の曉

がた、夫と見るばかりの月

いとかすかにさしのぼれば、

秋の名殘も一しほあはれに

覺えて

ほの〴〵を名殘と見つゝ秋の月

暮秋

塩負ふて山人遠く行あきぞ

秋の名殘山田の添水いとまあれや

あき餘波夕日の前に小雨降

あたら夜ををじかゞなけば秋は行

火ちら〳〵秋もゆくなり峯の堂

山風や兎鼻つく九月盡

綿弓の弦引きれて九月盡

宗旦の大工遣ひや九月盡

九月盡遙に能登の岬かな

冬之部

初冬や二ッ子に箸とらせける

湖上吟

霞日も又初冬のやうすかな

冬の日のさし入松の匂ひ哉

時雨

鳩の巣のあらはなるよりしぐれそめ

しぐれねばものあらたまる日もあらず

漁父畫讃

鱗のこゝろはふかしはつしぐれ

しぐれそめてばせを葉翠を繕はず

一むらの烟はなれて行時雨

しぐれ行果は一むらのけぶり哉

鐘の音やしぐれ降行あとのやま

しぐれけり尾根のすかひにわらび焚

つら〳〵と杉の日面行しぐれ

夕川や霧のしらみを行時雨

さし越ス や深山時雨のぬれ筏

若狭國にて

沖の雲しぐれて歸れ後脊山

鳥羽田には時雨ふるらし水菜船

酒屋あれば地に酒泉あり。

溺て泥のごとし。

眼にのぼる花かき交て一しぐれ

右うかむせ四郎右衛門亭

に遊びての也

挨拶

我ためのひと夜は菊の殘あり

義仲寺蕉翁牌前

霜にふして思ひ入事地三尺

けふの今いまより後のかれ尾花

霜の庵旅寐まねびに怪申

雲はしぐれ鐘は其世の感に伏

障子まで來る蠅も有翁の日

霜

蕣の花つむしもの鼠かな

霜冴て雀ひそかに鳴夜哉

つや〳〵と柳に霜のふる夜哉

霜滿る夜たゞ樟の匂ひかな

途中

霜に行草鞋のつまを焦しけり

しもを焼篝に寒鴉の聲くらし

空谷寒草

草かれて深谷の霜にあへりけり
霜枯て蔦の居る野の朝ぐもり

貧學

行燈に藥鑵釣りたる霜夜哉
夢人の浮橋かゝれ霜の閨
おもしろう嘘つけ霜の濡頭巾
しる人はしるらし霜のぬれ頭巾

文字摺石

草よくも生たり霜のすり衣
曉や鯨の吼るしもの海
夜の霜齒に答へるよ狄の聲

妻におくれし亞滿をいたむ

兩袖に泣子やかこふ閨のしも
目じるしの枯木たふれて霜の月

木がらし
ゆかしき物にてつれなきもの

木がらしにむかひかねたり辻謠

愛に悲しくて心ゆかぬもの

只一輪木がらしの風にさくら散

ことわりと思ひ辨へつゝ、胸安からぬもの

うらみねや又風の吹夜なり
木がらしの只は置まじ花ひとつ
風や木から落たる猿の尻
こがらしに豆の葉荷ふ人をかし
こがらしや灯心賣のうしろ影
風の芋かせをみだす眞柴哉

御堂の十夜にまゐりあひて父あひがたき法燈のかげにかゞまり、通夜の人々とゝもに念じつ。こよひ此みあかしに別れ奉らん事、名殘をしう唯心細う覺て

十方十夜御佛の前去がたき

小春

海の晋一日遠き小春哉
魚つりの編がさひとり小はるかな

歸花

わすればな忘れぬ宿の栞哉

歸花祖父が戀の姿かな
住の江や一もと草のわすればな
夫そこに草の中なる忘れ華

茶花

菜の花に兎の耳のさはる哉
ちやのはなや雲雀鳴日もあれば有

冬夜

ふゆのよやまとしからぬ稻光り
冬の夜や曉かけて山おろし

冬月

月の情冬を定めり樫木原
月寒く出る夜竹のひかり哉
冴きつて檜裂たり冬の月
砂に埋須磨の小家や冬の月

登山雞鳴

寒月の額にちかしをとこ山

寒

屋根うらに鼠鳴夜の雨寒し
寒きよの枯竹藪に明にけり

さむそらやたゞ曉の峯の松

幽　渓

山寒し出るより入日のあした

辻能の矢聲もかるゝ寒さ哉

妙義山に詣しかへさ

おもひ寒し峯の白雲吹わくる

寒天の行脚ならひにいたれば、白糸老人にいたはられて爐火右にかまへ、夜のかさね猶薄からず。しば〳〵安き思ひを得たり。

寒しとも思ひわすれて谷の聲

冬紅葉

十分に紅葉の冬と成にけり

東都に遊歴して郷に歸りし宰馬を訪ふ

ありやいかに隅田川邊の冬紅葉

知多の浦台中亭

汐風の吹よわるかたや冬紅葉

霜にぬれてもみぢ葉かつぐ小雀哉

雪後眞如堂の紅葉見にまかりて

めづらしや今朝みる雪の下紅葉

なつかしや雪見し後の下もみぢ

冬木立

冬木立馬一寸の行方かな

冬　川

冬川や簸(箕カ)に捨てやる鳥の羽

川中に川一筋や冬げしき

夕川や動かぬものゝ又寒し

冬　枯

ふゆがれや寺門かすかに人を呼ぶ

何おもふ冬枯川のはなれ牛

枯　野

出る日のと拍子もなき枯野哉

葎さへ枯て出ぬる戸節かな

けふも折翌もかれのゝ萩の長々

ぬつくりと夕霧くもる枯野哉

人日も耻もしどろに葛の枯葉かな

枯　蘆

蒼天に河邊の蘆のかれは哉

錦浦夜泊

枯蘆やしるべして行雨の聲

枯尾華

水際の日に〳〵遠しかれを花

芥火の烟の中に枯尾花

中〳〵に根づよく成ぬかれを花

落　葉

おち葉落そめて夜を鳴鳥かなし

落葉おちかさなりて雨雨をうつ

蒸ものや落葉堤の葭かこひ

あみ笠におちばかゝれり占や算

木の葉たく烟のうへのおちば哉

炬の火に落葉ふり分行夜かな

與板留別

此別梅も葉おちて柳ほそし

冬　構

越〻人は斯ても經けり冬がまへ

みそさゞゐ

壁くろや鼠行あふみそさゞゐ

冬籠

人嬉し京の眞中に冬ごもり
去君が車寄たりふゆごもり
冬ごもりとかくして世の情に落
蛆一羽我を廻るや冬籠
冬籠一字に迷ひ夜戸出哉
世を蟻のすさび悟らん冬ごもり

衾

さるにても輪回きたなし文衾

紙衣

腫物をかゝへる紙衣さはり哉
我かみこ鴨の足水かゝりけり

火桶

山居三日一日對客

山寒しせめて火桶の燒蜜柑
うき人の額にあてる火桶哉
居られし人の泪に兀火桶

えびす講

堂上に御沙汰有けりえびす講
屋敷から梅もらひけりえびす講

冬至

日は冬至埋れ蛙も目覺なむ
利にうときすねゝ人醉り冬至酒

鴛

殿下に召れ參殿つかふまつりて

あまつたふ星の御かげになく鴛

冬嶺江上を臨といふ鳥羽の湊を見廻りて

夕闇のまつ風のぼるちどりかな
蠣殼や下駄の齒音に飛鴛
濱ちどり雪の中より顯はるゝ
風はやく二ッにわれてむらちどり
心われしてや二瀨に鳴ちどり
月も見え雪も降出てなく鴛
曉をまぐれて行やむらちどり
闇明てかいくれみえぬちどりかな
水鳥やさすがに雨をうちそむき
水鳥の巴になりて狂ひけり
水とりの立行程や淀の松
人をたゞらみ聲也はなれ鷺
しのびねに鳴夜もあらん離れ鷺
うかゝと日に照れ居るやはなれをし
曉の山を越え來てうきね鳥
かひつぶり浮出まで見て過ぬ
雨もふり風も吹瀨のうきねどり
浮鴨や戲男に射崩され

鷹

出羽の國にて

あら鷹や山を出羽の朝曇り
鷹組て鶴の毛散すみそら哉
たかそれてむなしく月と成夜かな

蠣

いり蠣に軒の松風奪ふなり
煎蠣の跡しら雪となりにけり

から鮭

空也の痩にたくらべられつゝ或は增賀の腰にふれし

は、汝がいみじき冥加ならず。

から鮭や汝も木の端炭のをれからさけをしわぶりて我皮肉哉

河豚

今はなき身をもて鰒のいかり哉

身をまゝに沈めかねたり河豚の腹

生海鼠

生海鼠干伊良古が崎の二日風

昏ミ冥ミとして蒼海の浪にのたれ、あるは沙上にころがりて、終に庖丁にをはりを取汝を憐む。

くらきよりくらきに歸るなまこかな

網代

槇の嶋見ゆる網代のかゞりかな

春日野の片端麥を蒔そめぬ

冬田刈夕ぐれ人のひとり哉

炭がまや翌の烟の樟原

寒鳥の日を追入ぬあだゝらね

坂鳥の胸をうたるゝ笞かな

納豆叩衍や四百八十寺

風さえて今朝よりも又山近し

神樂

太郎吉が皷うつぞや里かぐら

鉢叩

にが〳〵しおのれ二代の鉢たゝき

煩腦の犬にかまれなはち叩

はちたゝき今はむかしの忍び路や

愚に歸る曉ごゑや鉢たゝき

冬鹿

さめ〴〵と鳴か冬のゝ離れ鹿

人をさへなつかし氣なり雪のしか

きのふ見し木下もさらずゆきの鹿

榾

曉や榾燒そへる山おろし

又ほだの火や曉かけてやまおろし

雉子兒釣しかけたり榾あかり

畵讃

親と子のうき世やかたるほだの影

寒菊

寒菊に南天の實のこぼれけり

かんぎくや更に花なきはなの後

水仙

水仙やうき世小路の玉すだれ

雪

薄雪や草の節さへをれかゞみ

雪もてる雲の尻尤ちからなし

ゆき空やおのれさかしき卵子うり

青雲や大虛に雪の降のこり

空高く低く雪吹を廻るかな

あやなくも霰降かつ小雪哉

鴈は悲し碍するは哀れ雪の人

柳折て雪を戀慕のわかし酒

鳥の殼叩衍やよるの雪

雪はやみて猶ふる雪のあらし哉

猪突の控に立る深雪かな

雪の人母や養ふ子や育つ

日くれむとして又雪の降初る

降行や又みえそむる雪の人

不破の雪さながら畫の色ならず

鉢の僧歸り來よ雪に物問む

積雪や紅粉吹かけし小傾城

月もれて雪の降迄も見ゆるかな

雪は降流るゝは漁父が火影かも

蓑の裾に小魚付たり市の雪

金閣寺閣下に老樹あり

月雪をこめて櫻の朕かな

佛魔窓馬州が十七回の句を乞れて

佛も魔も曉は雪の十七年

人の妻を失ひけるに

けふよりや月雪涙針目衣

雪の深かりける霜月、さりがたき夕よしありてともなふ人ふたり、かよはき從者ひとりぐして會津の山ぶみす。其日おもひさすかたまでは行もやられず、山賤をたのみよりて、よすがら焚火のもとにかいつぐみ一夜を明す。風の吹入破れば蓆などはりてふせぎとす。

人として雪に巣作る類ひかな

雪深く人は世渡る楫をたえて

老て壯なるものは白鶴のきよげなる也。かゞまざるは竹節のみさをなり。老人木吾子に廿餘年を經て對話すさらに今日白頭をいはず。

雪中に梅あり我にしのぶ草

霰

あられ降軒は黄めり正木つら

冬の情月明らかにあられふる

玉霰思ひまをけし竹柱

靜さや枯藻にまろぶ玉霰

たまあられ水に沈めば消ぬべし

氣たるみし鷹の面うつ霰哉

繩ふしに霰はさまる垣根かな

玉霰鍛冶が飛火に交りけり

氷

穡(ちしば)の何をちからに薄氷

はかなしや童文字書うす氷

大谷の御堂に母の骨ををさめ奉りて

氷なみだ御齒にしむな山おろし

寒夜

鉄床の音も撓まぬ寒夜かな

師走

さく〳〵と粟搗師走月夜哉

百姓の板戸負行しはすかな

旅行や一とせはたゞ茶一ぱい

落る齒のはじめて年の惜きかな

ある日嵐月一瓶の花を携來しを謝して

予が病を憐みて園中に數種の花採て起臥を慰らるる。其句ひいとふかく、露のきらめけるをうちみるより、頭のほとぼり胸のあつしさもすゞしく、

めざむる心地すれば、いさゝか筆をもとり見む、とするにつけてもおもひよりぬ。まとや朝川の畫圖をひらきて、病をわすれたるもげにさる事ぞかし。先水仙の冷かに咲出たるひかりには、玉の簾もしのばるれど、杜若のわすれ顔もなく臘氣ならぬ色にこそ、猶し心はひかるれ。何〳〵一室はつかに丈にみたざれども、花一筒に四季をこめたり。依てひとりおもふ。

齡延枕上蘆生夢
蝶舞枕邊莊子魂

咽をかまくら街道といへるは、天下老和尚の頓坐(挫カ)也。我久しく病勞れしそがうへに、彼街道ふさがりて苦痛する事十餘日、夢となくうつゝとなく今は蔦のほそ道のほそきかぎり、命にかゝるものとては、はつかに鐘のうるほへるのみ。

冬ごもりうき世の道はたえ〴〵に降は雪よ起返るちからむづかしや

感慨懺愧

あたゝかに着て耻かしや年忘おもひ出していふ事なかれ年わすれ

賀初老

とし忘れけふ白髮の仲ま入なやらふや今宵しのぶの戀もあらむ

遙見簾前士峯

年忘れ不二をとりまく坐敷哉
歳の暮隱者かたぎの耻かしき
年迫て風大虛(おほぞら)を鳴らすかな
としのくれ鏡の中にすわりけり

拾遺

佛仙

都の冬集序

北海に一仙あり。常に舌頭に有聲の花をあらはし、牀前無形の月を照らす。時に高吟舞踏して西に走り又東す。こも〴〵市中の優游にまじはりて他の風詠を甘じ、猶長安に入て宏く麗景にとゞまらず、熱爛三盃引かたけてついと飛揚す。しりへに一冊子を殘せり。とりて周擧はじめに贊す。

菩里歌

夜半の鐘の　おと絶て　めにみるよりも　霜の聲　きく耳にこそ

しみはすれ

友ちどり　呼子鳥　都鳥　はかなし　はかなしや　みやこ鳥

きのふ墨水に杖を曳て

柳條に月をかなしび
けふは杖を黄泉に曳て
弘誓の棹歌に遊ぶかし

夜半の鐘の　おと絶て　むなしき
松を　まつのかぜ

聖護院の杜の空巣には
妻鳥こそまどふらめ
難波江の芦の浮巣には
友鳥こそわぶらめ

わぶらめやいた〳〵し　伊丹のいめぢいた〳〵し

さらでだもしぐれの雨は降ものを
心に雲の行かひて晴ぬは誠なるかも

友ちどり呼子とり　あゝ都鳥はかなしや　都鳥はかなしや

布哭夜半亭凡董

蘇川の東涯にひとつの樓あり、望嶽と名づく。山は背き程に隔り水は長く其終を盡し、孤村の烟は征客の蹤をかくす。尾越のわたり、駒墳の渡舟、寸馬豆人おのづから畫中にあそぶ。遊ぶ友乏からず。今宵は水上の月に清興あらせんと、酒携る僧あれば、佳肴を器にす俗あり。糸あり、竹有。三舟の才待におそしなどさゞめきあひ、一葉をうかべて千里に游むとす。あらうたて、雲のはたてのむら〳〵とうちしらみて、雨聲しきりに川づらを這ひのぼれば、蓮をまた望嶽にうつして

筏士にとへば遠山も雨の月

世繼集小序

煙客を率て十洲に游吟をおもふものは、湖東日野の梨丈ぬしなり。頗披煙弄月の士、常に清響を吐て悟とす。此春齢老のはじめにかすまへられしより、遠近交游の文晋同郷忘年の友生、毛伐洗髓をもてほぎことをよす。其辭嘹〻として鳴鶴穿雲の聲あり。餘韻あやなる哉。あやをあやとして一卷をあみあらはし、是に名あらむことを告ぐ。おもふに始あるものは必後なからんや。猶一紀にあふごに此卷の後へを繼出さば、さながら壽に從ふなりとすゝめて、世繼集とよばしむ。おのれ曉臺、鳴鶴穿雲の聲を合せて龍門の南窓にかく言。

今はむかし、先師机下に一冊子あり。こは折にふれたる自詠を筆し、或は門人等打聞まゝにしるしおけるを、ほど遠き朋がらは見聞のつぶさならざる事をうらみ、あながちに木に彫む事を乞侍れど免し給はざりしを、師遷化の後程なく三傑集に、何くれと是がなかばを出せり。剩うち聞のわいだめなく、頗誤りつたふる事、三に一ッは師の本意を失へり。今其誤を正しさとさしめむと、天地の二巻を著す。但古く冊子に出たるは、おほやうは再びせず。且かなたこなたに落散所の句も又鮮なからず。こはより〳〵に渉獵して、もれたるを掬ひ遺れるを拾はゞ、再び豁然として彌全を得むと、

暮雨臥央しか云

文化六年
己巳仲秋日

書林

名古屋本町一丁目　風月堂孫助

同　本町七丁目　永樂屋東四郎

同　本町十丁目　松屋善兵衛